

〔学術論文〕

『雑談集』にみる医と病

Medicine and illness in the *Zōtanshū*

土 屋 有里子

Studies in Humanities and Cultures

No. 29

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 29号

2018年1月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY

NAGOYA JAPAN

JANUARY 2018

〔学術論文〕

『雑談集』にみる医と病

土屋有里子

はじめに

一、医僧として

一、一 東福寺派の医術

一、二 神咒による治療

二、定業と病

二、一 治せない病

二、二 名医了仏房

三、食と病

三、一 養生と食

三、二 古病と雑病

三、三 食への執着

おわりに

キーワード…無住道暁、『雑談集』、『沙石集』、医僧、梶原性全、

『頓医抄』、『万安方』、東福寺、養生

はじめに

無住道暁は鎌倉時代後期の僧であり、『沙石集』¹聖財集『雑談集』²の著者として知られている。晩年に書かれた『雑談集』は、『沙石集』にはなかった自らの人生の回顧録的な要素が含まれているが、その中でも多く言及されるのが、医と病に関する話題である。本稿ではその記述をたどることにより、無住の医僧としての側面を考察していきたい。

一、医僧として

一、一 東福寺派の医術

無住と医術との関わりは、既に小島孝之氏の論考²に明らかにされている。『鹿苑日録』³の中の景徐周麟「日涉記」明応八年（一四九九）四月十二日条には、目を患っていた周麟のもとを耕雲と哲蔵主という二人の医者が訪れ、外科的治療を行った哲蔵主に対して周麟が流派を尋ねたところ、「東福派」との返答であった。彼は

東福派也。聖一之嗣、尾張に在る者。諡は一円禪師と曰ふ。諱は道暁。字は無住。沙石十巻を著はす者也。又聖財集五巻。雑談集五巻在り。³

と答えており、自分の医術は東福寺開山聖一（しやういつくくしえん にべんえん）国師円爾弁円（以下「円爾」）の嗣である尾張の無住道曉から始まるものであり、東福寺派の医術の流れの中に、無住を位置づけているのである。

さらに鎌倉後期に活躍した医師である梶原性全（かじわらしやうぜん）による『万安方』⁴ 卷五十二「愈家遇仙丹」には次のような記事が載る。

私云、此薬、参州実相院の導生比丘、在唐九ヶ年、只医術を習伝する為也。仍りて黒錫丹、養生丹、靈砂丹等諸方、及び脈動、針灸口決、此遇仙丹と并せて之を相伝す。導性比丘より一円禅師尾州長母寺長老、法眷の好を以て之を伝受す。一円禅師従り、兄弟の昵を以て実照に之を伝ふ。実照自り亦性全之を伝受す。此の方、宋朝に於いては只愈家之を秘す。余家に伝へせしまざるなり。禁防軽からず。本朝に於いては即ち導性禅師の一流に伝来す。予、掌握するに至るを以て、子孫之を秘すべし。之を秘すべし。

三河の実相院の導性比丘（どうしやうひく）は、九年間、ただ医術を学ぶただけに宋に滞在した（「在唐」とあるが宋のことである）。遇仙丹を始めとした薬の処方、脈動や針灸の方法等を習い、帰国した導性はそれを無住に伝えた。無住は弟（『雑談集』「瞋恚ノ重障タル事」からは弟がいたことが判明している）である実照にそれを伝え、実照は性全に伝えた。大変な秘事であるため、子孫はこれを密かに守っていくように、とのことである。小島孝之氏はこの記事について、実照から性全への伝受

について何の説明もされていないこと、『万安方』が性全の一子源三冬景以外の他見を禁じた家学の秘伝書であることから、実照と性全は父子ではないかと推測している。つまり無住は、鎌倉時代を代表する医師である梶原性全の伯父にあたるということになる。

また三河の実相院とは、愛知県西尾市にある実相寺である。創建は文永八年（一二七二）、開基は吉良満氏、開山は円爾と言われているが、実際には弟子の応通禅師無外爾然（むがい にねん）（以下「爾然」）が住持となった。爾然は台密の『阿婆縛抄』の初伝者でもある。以前拙稿において指摘した通り、当時の実相寺は日宋経験者が多く集う、兼修的な気風の濃厚な大寺であり、医術を習得し帰国した導性が止住するにふさわしい場所であったと言える。導性、無住、爾然は円爾門下としてのよしみと実相寺という場を通して交流を持ち、その中で導性から無住への、後に東福寺派と呼ばれる医術の伝受が行われたのである。

一・二 神呪による治療

『雑談集』には、実際に無住が医僧として活動した様子が記されている。

愚僧、智モ無ク慈モ無シ。然ルニ多年菩薩戒ヲ授ケ、神呪ヲ誦スレバ重病除癒シ、寿命安穩ナル檀那知音多シ。（「凡聖不二事」）
愚老菩薩戒受得、随分ニ守リ侍シカドモ、志アサク、身ヨハクシテ、病縁ニサヘラレ、業障ニヲカサレテ、多ク違シ侍リナガラ、病人戒ハ同法ニ授侍ル事、多年重病ノ者ニ之ヲ授ク。同ク神呪誦

シテ、即チ癒タル知音檀那、当国他国ニ多ク侍リ。カレ行徳ノ薰習ニアラズ。菩薩戒ノ威力ノ勝タル故ヘ也。劍ノヨキハ幼少者ノモテルモ、人コレヲソル、ガゴトシ。(菩薩戒ノ徳ノ事)

無住は現実に、医僧として知人や檀那の病気を治癒させていたようである。ただこはいわゆる外科治療ではなく、「神咒」を唱えるという仏教的療治の実践である。古記録などで医僧が頻出してくるのは、寺院の世俗化が進んだ平安中期以降のことである。天皇や貴族の医療を主に担ってきた官医の技量が著しく低下した中世になると、官医の穴を埋めるように医僧や民間医の活躍が目立つようになる。彼らは中国の医学を積極的に取り入れたが、やはり治療は医学的な技術と仏教的な祈祷が併存するのが常であった。神咒は靈力を秘めた陀羅尼や呪文であり、あらゆることに効果があるが、殊に病氣治癒に関しては格別の力を持つとされる。『雑談集』『神咒功德ノ事』には、「こむらがえりが起こったら、木瓜をあぶってさすると治る。もし木瓜がなかったら、口で『木瓜木瓜』と唱えればよい。自分自身効果があつたら、「犬に噛まれたら、虎の骨でなでさすると痛みがなくなる。もし骨がなかったら、「虎来虎来」と唱えてなでさするとよい」などと書かれている。医書の中にある説として、「魚の骨が喉に刺さったら、鵜の羽か骨でなでさすれば癒える。網でなでもよい」ともあるが、丹波雅忠の『医略抄』(一〇八二)「治食諸魚骨硬方十九」には、鵜の羽も魚骨も網も焼いて服用とあり、言葉にする、なでさする、という行為の

みで解決してはいない。巷間に流布する間に変化したとの捉え方もあるが、「神咒」を重視する無住にとっては受け入れやすい説であったと思われる。無住自身が陀羅尼の功德で実際に病人を救った体験談としては、次のような話もある。

ある遁世上人が病氣になり、病床であまりに苦痛が激しいので、周りの人は打つ手がなく困っているだろうと思い、自分は伴も連れずに一人で行き、病人の傍らでひたすら千手陀羅尼を唱え続けた。すると病人も陀羅尼を唱えて起き上がり、「このような薬があつたのですか」と涙した。腰の辺りから水をかけたように涼しくなつて、頭にも水をかけたような心地で熱が下がり、まもなく快癒した。当時もある人である(「靈之事」)。

宋伝来の最新の医療知識に触れながらも、病氣治療における神咒への信頼は相当高いものであり、万策尽きた後の最後の一手として実践されていたことがわかるのである。

二. 定業と病

二. 一 治せない病

現代人は病氣になると、医療技術で完治することを望み、医療が限界を迎えると、民間療法や祈祷に転ずる傾向がある。病氣が治らないと、「これが運命なのだ」「寿命なのだ」と自らに言い聞かせるかもしれないが、仏教的な祈祷に多大な信頼を寄せていた中世においては、

その失望感も甚大で、「なぜ神仏は救ってくれないのだ」という不平不満が生じた。その問いの先にあったのが、「定業」による病である。定業は前世において自らが作った罪であり、神仏の力をもつてしてもどうすることもできない。医術も神仏も全てが定業の前では打つ手が無い。「神力業力に勝たず」という言葉を好んで使う無住にとつても、それは動かしようのない事実であった。定業による病についての言及は、次に挙げるように多岐に渡っている。

- ①：（中略）受戒ノ病人、多分癒ヘ待ル也。但定業ハ仏在世モ猶ヲ癒ヘズ。イカバタスカランヤ。不信ノ輩ハ、定業人癒ヘザル故、仏法ニ効驗無シト思テ、帰依スル心ナシ。コレ業障ノイタス所也。効驗アルヲ見トモ、自然ノ果報ナムド思テ、仏徳ヲ信ゼズ。愚癡ノ至リ也。（『菩薩戒ノ徳ノ事』）
- ②前世ノ業ツヨクシテ、今生ノ行業、タヤスク彼ヲ除カザルハ、今生ノ行業ハ来世ノ因タルベシ。
- ③浄名居士ノ病ノミセシヲ、人訪ヒテ、「ナドサシモノ善人カクヲハスル」ト云シ、返事ニ、「我今ノ疾苦ハ、皆過去ニ由ル。現在ノ修福ハ、報当来ニ在リ」。殺生セヌ者ハ寿命長ク、布施セヌ者ハ貧窮ナルモ此心也。又涅槃經ニ、「智恵無ク、行徳無キ物ハ、今生ノ小患、当来ニ大苦ヲウク。サレバ安穩ナルカヒナシ。智恵行善ノ人ハ、今生ノ大患、行業懺悔ノ力、転重軽受シテ、病患災難有テ、当来ノ大苦ヲ、今生ノ小苦ヲモテ脱ルベシ」ト説ケリ。此ノ理ヲ

知ラヌ人ハ、悪人ノ安穩ナルヲ見テ、罪業クルシカラズト思ヒ、智者行善ノ人ノ、病患災難アルヲ見テ、福智ヨシナシト思ヘリ。

④玄奘三蔵ノ、臨終ノ時、苦痛ヲハシケルハ、人不審ス。他人有テ、「此小苦ヲモテ、昔ノ業ツクノヒ給ヘリ。悦ビ給フベシ」ト申ケリ。

⑤悪人ハ我身先業ニヨリテ、持テモ子孫必ズ久シカラズ。コレヲ積悪ノ余殃ト云ヘリ。善人又我身災難ニアエドモ、子孫福有リ。コレハ積善ノ余慶也。（②）⑤「災難病患等ノ有事」

⑥サシモナキエセ医師ヲ請ジ、薬ノ直ウシナヒ、纏頭費サムヨリハ、其功ヲ以テ経ヲ信ジ、読誦・書写・供養・讃嘆セバ、業病モ癒ヌベシ。定業ナラバ後生憑アルベシ。医書ニ云、「庸医ノ病ヲ治スル、治セザルニハシカラズ。大医猶治シガタシ。庸医ハ猶病ヲ増ス。治セザルニヲトレリ」ト云ヘリ。巫女ヲヨビテ鼓ヲウチ、湯ヲタテ、神ニ祈ル、鬼神猶我ガ身ノ生死、自在ナラズト云ヘリ。定業タスクベカラズ。只仏陀・経王ヲ信仰シテ菩提ヲ心トスベシ。サレバ現世ノ祈祷、後生ノ資糧、此ノ経ニ足レリ。此ノ事医師・御子聞テ腹立シツベシ。然レドモ、心有ラン人ハ、仏教ヲ聞テ信仰シ、菩提ヲ心ザスベシ。愚老ノ心ヲイタムベカラズ。有心ノ信ヲ悦ベシ。仍テ之ヲ誹ラン。仏神知見シ給フベシ。（『法華事』）

まず①において、受戒した病人は多く快癒するが、定業のみは別であるのに、不信心な人は仏法に力がないからだと思う。効果があると

今度は、自分の果報だと思つてやはり仏法を信じない。愚痴の極みであると述べている。この業病に苦しんだ例として、③では浄名居士を、④では玄奘三蔵を引き合いに出している。『涅槃經』の「転重軽受」の考え方をもとに、現在の病苦は来世の重い苦しみを現世の軽い苦しみに転じているのだ、と説明する。現在でも悪いことばかりをしている人がなぜか幸せそうで、善良な人がなぜか病や災難に見舞われる、という不条理を感じることがある。このような疑問、不満の受け皿として、「転重軽受」の考え方は機能するのである。⑤では悪人が自分を持ちこたえても、子孫が必ず断絶すること（積悪の余殃）と善人が自分不幸であつても子孫が繁栄すること（積善の余慶）を示して、「転重軽受」の教えが揺るぎないことを示している。この「転重軽受」の語は『往生要集』にも見られるが、法然が述べる次の言葉に通底するところがあるだろう。

又宿業限りありて、受くべからん病は、いかなる諸々の仏神に祈るとも、それによるまじき事也。祈るによりて病もやみ、命も延ぶる事あらば、誰かは一人として病み死ぬる人あらん。況んや又仏の御力は、念仏を信ずる者をば、転受軽受と云ひて、宿業の限りありて、重く受くべき病を、軽く受けさせ給ふ。況んや非業をはらひ給はん事ましまさざらんや（『黒谷上人語灯録第十二』「浄土宗略抄」一）。

二、二名医了仏房

業病の難治を説く中で、無住が名医と評する人物がいる。もと奈良の僧であり、関東で活躍する医僧了仏房である。

坂東二名医アリキ。了仏房ト号ク。本ハ南都ノ僧也。大方才覚ノ仁ナリシガ、医書作レル中ニ、薬ノ殊勝ナル事、本証・現証カキツクシテ、後ノ句ニ、「タバシナヲラヌ事モアリ」ト云ヘリ。コレ老子ノ云ヘル如ク、「美言ハ真ナラズ。真ノ言ハ美ナラズ。マコトノ言タル故ニ美ナラズ」。大般若ニ、般若ノ徳ヲ説テ、「一切災難病患寿命ネガヒノ如クナルベシ」ト云テ、「但シ定業ノ今ノ世ニ受クベキヲ除ク」ト云ヘルニ似タリ。

彼医師、秘事口伝残リ無ク伝受シナガラ、病者ハイト癒ル事ナカリキ。コトニ有徳ノ大名ノ病人スベテ癒ヘズ。非人等ハ癒侍シ。彼ノ仁申ケルニ、「南都ニ大医有ケルガ、秘書・口伝残リ無ク伝受シテ、御房コレニ定テ身一期助クベシ。自然ニ得分有覽時ハ、恩ヲ知テ相訪ヘ」ト契約シテケル。サル程ニ、得分有ケレドモ、都テ師ノ恩報ゼズ。師匠申ケルハ、「此ノ僧冥加アラジ。我ガ恩ヲ報ゼズ」ト。此ノ事タガハズ、都テ得分有リヌベキ病者イヘズト云ヘリ。（菩薩戒ノ徳ノ事）

了仏房は医書を作り、薬の効能、本証と現証を書き尽くした後に、「ただし治らないこともある」と付け加えた。真実を述べる言葉は耳

に優しいものではない、という老子の言を引用しつつ、無住は大いに共感を示している。了仏房は奈良の大医から秘事口伝を残らず伝受しておきながら、病人をあまり治すことができなかった。特に裕福で勢力のある人はまったく治せず、非人等は治せることもあった。奈良の大医は、「病気を治して利益を得たら、分け前を持って尋ねてこい」と約束したにもかかわらず了仏房が来ないことに「恩知らず」と言っていたようだが、もうけがとれそうな裕福な病人はまったく治せなかったのである。なぜ裕福な人は治せないのか。治せないのは業病だからであろうか。病氣治癒に関して富者と貧者を二項対立で捉える考え方は、次の養生の話にも引き継がれるのである。

三、食と病

三、一 養生と食

養生は健康を維持し増進するために努力することであるが、鴨長明も『方丈記』において「つねにありき、つねに働くは、養性なるべし。なんぞいたつらに休み居らむ」と養生の大切さに触れている。『雑談集』における養生に関わる言葉は次のようである。

①養性ハ、医書ノ中ニ多ク記セリ。世間ノ人、此ヲ知ラズ。尤モ用意有ルベキ事也。細ニ記スニカタシ。大旨ハ、且ヨリ午時マデハ、恣マヽニ食スベシ。未申ノ後ハ食ヲ減スベシ。夜食尤脚氣等

ノ諸病ニ調セザル事也。

②然ニ世ニ有テ大ナル人ハ、終日ニ出仕シテ、晩ニ及デ帰テ、種々ノ美物ニテ、飽食シ飽酒シテ、房事ナド行スル、大ニ養性ニソムク。発病ノ因縁也。カヽルマヽニ、世間ニ豊饒シテ家ヲツギ、大名ナドイワルヽ人、多分ハ命ミジカシ。

③貧家ハヲノヅカラ貧シキ程ニ、必シモ養性トハ思ハネドモ、得ガタキマヽニ、多ク空腹シ、晩ニ食スル事スクナシ。脚氣等宜シ。夜食ハ、不食・飲水・大腹水・悪瘡等皆夜食ニヨル。脚氣故ニ発ル。貧家ハ身疲レタレドモ、多ハ病ナシ。タゞ飢ヲ病トス。（「養性ノ事」）

養生は医書の中に多く書いてあるが、早朝から正午までは好きなように食べてよい。午後から徐々に食を減らし、夜食はもつてのほか。脚氣などのあらゆる病のもととなる①。世間で勢力を誇るような人はその生活習慣から養生に背き発病し、ほぼ短命である②。私は貧しいのでほとんど空腹であり夜食べることも少ない。自然に養生となっている。夜食は諸病の原因になる。私は身が疲れているだけで病になることは少ない。ただ飢えていることを病としている③。という意である。無住に言わせれば、病氣や寿命という面において、裕福な人は圧倒的に不利なのである。それは彼らの、贅にまかされた生活そのものがもたらすものと言える。無住自身も脚氣で座禅を諦めたことを始めとして、病身を随所で嘆いているものの、裕福な人が罹患するよ

うな病とは無縁であると言う。彼がここで主張する病はただ一つ、「飢え」である。この飢えを病とする点については、次にあげるように、律の中にある「古病」の考え方に拠るのであろう。

三、二 古病と雑病

①律ノ中ニ、病ヲ云ヘルニハ二有リ。古病・雑病。古病ハ飢也、雑病ハ四大ノ不調也。富メル人ハ食過テ雑病ヲワヅラフ。貧家ハ不足ニシテ古病ヲ愁フ。八苦ノ随一、病ナキ人アルベカラズ。サレバ富メル人モ、ウラヤマシカラズ。イツトナク、病スル多シ。古人ノ云、「四百四種ノ病ハ、宿食ヲ根本トス。三途八難ノ苦ハ、女人ヲ根本トス」。

②カ、ルマ、ニ、世ニアル人ハ、古病ハノガレテ雑病ニヲカサレ、貧家ハヲノヅカラ養性スル程ニ、雑病ハノガレテ、古病ヲ悲ム。世ニアリテ富メレドモ、命長カラズ。長命ノ物モ、貧シケレバ生キタルカヒナシ。此又作半也。

③薬ノ草モ、肥タル地ノハ効能スクナク、疲タル地ノハスグレタリ。人モ肥タルハ肉スギテ力ヨハク、気短シ。疲タルハ中く骨ト皮バカリニシテ、気ツヨク侍リ。人肥タルガ故ニ貴カラズト云ヘル、誠ナルカナ。（「養性ノ事」）

律の中では、病を古病（飢え）と雑病（四大不調、体の病）に分け

ているという。病因による病の区分は多くの經典に見られ、例えば『摩訶止観』では身病（四大不調）と心病（貪瞋癡の三毒に基づく病）に、『大智度論』では業病（定業による病）と現世に原因を発する病に大別しているが、飢えを「古病」とする典拠は今回見出すことが出来なかった。①の「四百四種ノ病ハ、宿食ヲ根本トス。三途八難ノ苦ハ、女人ヲ根本トス」は、唐の南山律宗の開祖道宣が著述した『浄心誠観法』に拠っているため、南山律系の何らかの典拠があるとも考えられる。③では肥沃な土地で育った薬草よりも痩せた土地で育った薬草の効能が大きいことを譬喩として、肥えた人は脂肪がありすぎてかえって力が弱く短気で、痩せて骨と皮ばかりになった人は根性があると言う。「人は太っているからといって優れているとは限らない」と続けることを考えると、ここも単なる太い細いの比較ではなく、太い⇨富裕、細い⇨貧困のメタファーなのである。富裕な人は一見羨望的になるかもしれないが、病という面に関してはそうとは言えない、そして貧しいがゆえの食物の欠乏を、養生、未病の阻止という積極性に結びつけていこうという点に、無住の強い主張が見てとれるのである。

三、三 食への執着

病を防ぐために養生を説く無住であるが、言葉の端々に見え隠れするのが食への強い興味である。

まずは先の養生にも通じるが、「食べ過ぎない」ことについての言及である。

食物モ過テ病ヒヲコル。不足ニテ力ナシ。經ニ云、「多ク食スレバ病苦ヲ致シ、小シ食スレバ氣力衰フ。中ニ処シテ食セバ科高下無キガ如シト云々」。八斎蘭戒ノ中ノ、不過中食ハ五道ノ因ヲ断ジテ、中道ニ住セシムタメナリト云ヘリ。「地獄ハ夜中ニ食シ、餓鬼ハ初夜ニ食シ、修羅ハ日晡ニ食シ、畜生ハ時刻ナシ、諸天ハ朝食ス」ト云ヘリ。（中道義ノ事）

食べ過ぎると病気になるし、あまりに食べないと力が出ない。ほどほどが良い、ということだが、道宣の『四分律刪繁補闕行事鈔』にある「因説偈云、多食致病苦。小食氣力衰。処中而食者如秤無高下」に拠ったと思われる。

また次の一説話は食と医の関連説話としても興味深い。

漢土大臣ノ召仕ル、官人、昼寝シテ主ノ召ニ参ゼズ。次ノ日子細ヲ聞ニ、冥官ニ召仕ハル、ヨシヲ答フ。何事ニ仕ハルト問エバ、「三品以上ノ食ノ沙汰ヲ仕ル」ト云。「サラバ我明日ノ食勘ヘヨ」ト云。一紙ニ書テ「封ヲ後ニ御覽ゼヨ」ト云フ。次ノ日王ニ召サレ、食スギテ瀉薬ヲ以テ下テ、小橘皮湯服シタリケル。日記ニスコシキモタガハザリケリ。（天運ノ事）

本話は智覚禪師延寿の『宗鏡録』卷七十一を典拠にするとと思われる。

『宗鏡録』では唐の官僚で、後に晋国公に任じられた韓滉の話となっており、話の筋は『雑談集』とほぼ同様であるが、病気の経過はより詳細に記されている。韓滉の臣下が遅刻したので理由を聞いたところ、「冥土の官僚として働いていました」との返事。「どんな仕事だ」と聞いたところ、三位以上の方の食の手配をしていたとのことなので、「それならば私が明日食べるであろう食事を思案せよ」と命じたところ、紙に書き付けて「後々御覧下さい」と言った。果たして韓滉は、翌日下剤でお腹を通し、橘皮湯を服用することとなった。臣下が書き付けた紙には、その通り書いてあった、という内容である。『宗鏡録』によれば、韓滉は「麤糜米を固めたようなもの？」を食べてお腹が張り、医者に診せたところ、「お腹が食物でいっぱいです。橘皮湯を少し飲んで、夜になったら漿水（重湯のようなもの）を飲めば明日の朝には治るでしょう」と言われたとのことである。橘皮湯は蜜柑の熟した果皮を乾燥させて煎じた薬湯であり、現在でも、胃もたれや腹部膨満感に有効な漢方の生薬として使用されている。全百巻という大部な『宗鏡録』の中でこの記事に着目したのは、やはり無住の医と食への関心ゆえであると思われる。

最後に、無住の食への興味がよく出ている和歌を紹介したい。

座禅誦經学シカキヨム人ゾナキ 飲食遊ビ色ニノミトム
（座禅をしたり経を読んだり学び書き読む人がいない。飲み食い遊んで色事へのみ熱心だ）

座禪誦經談義ノ座ニハ眠ドモ 飲食時ハ目ヲサマスカナ

〈座禪や誦經、談義の場では寝ているのに、飲み食いする時は目を覚ますことよ〉

食物ヲ座禪ノ床ニヲキタラバ公案ヨリハ目ハサメヌベシ

〈食べ物を座禪をしている床に置いたならば、公案（禪宗で修行者に与える課題）を置くよりも目が覚めるだろう〉

モロトモニ大乘ナレド大乘ノ座禪ヨリ茶ハ目コソサメケレ

〈両方「大乘」という名前であるが、仏教修行の座禪よりは酒（大乘の茶と呼ばれる）の方が目が覚めるであろう〉

当時ノ作法、常ニ煙絶ヘ、夏ハ麦飯・粥ナドニテ、命ヲツギ侍リ。

愚老病躰、万事不階ノ中ニ、老子ノ云ヘル、禍ノ中福ニテ、麦飯ト粥ヲ愛シ侍ル故、分ノ果報也。述懷

サラズトモ愛スルヨシニヒナシテ 世ヲワタルベキ粥ト麦飯
（本当はそうではないが、好きなのだと言って、生活のために食べている粥と麦飯）

貧しさゆえに夏はもつぱら粥と麦飯で過ごしていたらしい。もともと嫌いではなくてよかった、これこそ災いの中の幸運だという、無住の苦笑が浮かびそうな、少し自虐的な一首である。

おわりに

無住は東福寺派医学の初発段階に位置していた医僧であり、医と病、食への興味は『雑談集』からもうかがい知れるものであった。自身が病がちであったこともその興味の源泉となっていたかもしれないが、一方で仏教者としては一応禁忌である酒を愛し、美食への憧憬も捨てきれない、洒落な面も持ち合わせている。無住の著作の魅力は、規範にとられない好奇心によって得られた多種多様な話材であり、その一端に、鎌倉時代の医や病、養生に関する情報が含まれることは貴重である。ただ彼のもたらす医学的情報が、当時の医師の著作等に照らしてどの程度の整合性、または異質性を含んでいるのか、相対的な考察が必要となるであろう。

無住の甥と考えられる梶原性全の『頓医抄』や『万安方』、無住と同時代に宮廷医師であった惟宗具俊が記した『医談抄』等との関連を明らかにしていく必要がある。また病身であり医僧であった立場上、無住は看病に関する言葉も多く残しており、良忠の『看病用心鈔』や虎関師鍊の『病儀論』との比較考察も、今後の課題となるであろう。

- 1 『雑談集』の本文は中世の文学『雑談集』（三弥井書店 一九七三年）に拠るが、句読点を私に改めたところがある。
- 2 小島孝之「無住伝記小考―医術と思想とをめぐって」（『国語と国文学』52、12 一九七五年十二月）↓「無住と医術」（『中世説話集の形成』若草書房 一九九九年）
- 3 『鹿苑日録』第四卷（続群書類従完成会）をもとに私に書き下した。
- 4 梶原性全については、服部敏良『鎌倉時代医学史の研究』（吉川弘文館 一九六四年）、石原明「梶原性全の生涯とその著書（二）（二）」（『日本医史学雑誌』6、2・4 一九五六年三月・八月）に詳しい。
- 5 土屋有里子「無住と天台密教―『阿婆縛抄』と三河実相寺―」（『日本文学』55、12 二〇〇六年十二月）
- 6 新村拓『日本仏教の医療史』（二〇一三年 法政大学出版局）
- 7 『浄土宗全書』第九卷所収本をもとに、私にカタカナをひらがなに変更し校訂した。